2 Григорьева С.Г. Развитие инновационного мышления современного учителя / Педагогическое образование и наука. - №12, 2010. – С. 63-65.

3 Лазарев В.С. Управление инновациями в школе. – Центр педагогического образования. – 2008. – 352 с.

4 Новикова Г.П. Ориентация на гуманистические традиции и ценности как идеология инновационных образовательных процессов. / Педагогическое образование и наука. - №5, 2005. – С. 15-20.

5 Гегель Г.В.Ф. Соч.: В 14т. – Т.12. – М.: Гос. социальное изд-во, 1938.

6 Никишина И.В. Инновационные педагогические технологии и организация учебно-воспитательного и методического процессов в школе. – Волгоград: Учитель, 2007. – 91с.

7 Новикова Г.П. Инновационная деятельность – важнейшее условие профессионально-личностного развития педагога // Журнал МАНПО «Педагогическое образование и наука» - №3, 2015. (ВАК РФ). - С. 11-14.

カザフ語母語話者による日本語依頼表現の誤用の可能性：カザフ語の еді から想定できる誤用に着目して[1]

M. Shadaeva – *M.A., National Graduate Institute for Policy Studies,*
S. Borankulova – *M.A., al-Farabi Kazakh National University,*
Ninomiya Takashi – *Ph.D., University of Tsukuba (Japan)*

要旨：カザフ語母語話者が日本語の依頼表現を作る際にいかなる問題が起こりうるかを検討することを本稿の目的とする。特に еді から誤った日本語訳が作り出される可能性を指摘する。調査の結果、カザフ語の еді のように、主節の動詞を過去形にすることで依頼の押しつけの力が和らげられるとカザフ語母語話者である日本語学習者が考え、「～が必要でした」「～ていただければと私は思いました」のように、依頼者の願望が過去の出来事であり、被依頼者の対応が手遅れであるという表現を学習者が作り出しうる。

キーワード：異文化間発話行為実現プロジェクト、依頼表現、過去時制

1. はじめに

本稿では Blum-Kulka et al. (1989) による異文化間発話行為実現プロジェクト (Cross-Cultural Speech Act Research Project、以下 CCSARP) で規定されている時制 (tense) に着目する。依頼に際して、主節の動詞を現在時制から過去時制によることによって、その押し付ける力を弱めることができる言語が存在する (例えば、英語、フランス語など)。カザフ語の еді は過去時制を示すだけでなく、依頼表現において押し付けの力が弱める機能を有する。一方、日本語の依頼にはそれに相当するものはない。それによってカザフ語母語話者が日本語の依頼表現を作る際にいかなる問題が起こりうるかを検討することを本稿の目的とする。結論として、カザフ語の еді のように、主節の動詞を過去形にすることで依頼の押しつけの力が和らげられると学習者が考えてしまうと、「～が必要でした」「～ていただければと私は思いました」のように、依頼者の願望が過去の出来事となり、被依頼者の対応が手遅れであるという表現を学習者が作り出しうる。

2. 先行研究

Blum-Kulka et al. (1989: 11-12) によれば「依頼はプレイベントな行動であり、話し手が聞き手に実施して欲しい行動を口頭あるいは非口頭という手段によって示す表現であり、フェイスを脅かす行為 (Brown & Levinson 1978) である。つまり聞き手は「依頼」を自分の行動の自由を侵害する行為であると解釈する。一方、話し手は「依頼」に際して、自分の要求を聞き手に押し付けないように努める」であるという。Blum-Kulka et al. (1989: 17-18) は依頼の構成要素を注意喚起部、主要行為部、補助部の 3 つに分けている。

・John, get me a beer, please. I'm terribly thirsty.

上の John という呼びかけが注意喚起部、依頼内容である get me a beer, please が主要行為部、依頼の理由となっている I'm terribly thirsty が補助部である。Blum-Kulka et al. (1989) によれば、主要行為部は依頼内容の押し付ける力を弱めたり、強めたりすることができるという。前者は格下げ、後者

[1] カザフ語国立大学東洋学部の日本語教師による研究プロジェクト「カザフ語母語話者による第 2 言語としての日本語習得研究」の一環である。本稿の略号は次の通りである。1.=1 人称、2.=2 人称、3.=3 人称、sg.=単数、no.=普通体、po.=敬体、完副=完了副動詞、予形=予期形動詞、ø=ゼロ記号。

は格上げと呼ばれる。格下げには統語的格下げと語彙・句的格下げがある。上の please は語彙・句的格下げの 1 つであり、ポライトネス標識と呼ばれるものである。Blum-Kulka et al. (1989) は統語的格下げとして疑問、接続法、条件法、時制などを挙げている。Blum-Kulka et al. (1989: 282-283) の時制の例と説明は以下のとおりである。

・I *wanted* to ask you to present your paper a week earlier.
・I *was wondering* whether you could give your presentation in a week's time.
・Je voulais te demander de repusser ton expoé d'une semaine (私は君に提出を 1 週間延期するようお願いしたんですけれど).
「現在時制との対比で過去時制が格下げとしての役割を果たす。つまり現在と過去は置き換え可能であり、それによって発話内容の中身に変化はない (I want to ask you to present your papaer a week earlier と比べてほしい)」

上のフランス語の例は現在形の veux (私が望む) の代わりに、半過去形の voulais (私が望んだ) が用いられている。なお Blum-Kulka et al. (1989) は統語的格下げとして、ドイツ語とフランス語の例を示しているが、両言語は接続法、条件法を形態論的に示す。上のフランス語の現在形と半過去形の違いも形態論的な違いである。そのため Blum-Kulka et al. (1989) の統語的格下げという用語には問題がある。統語的格下げを統語論と形態論を包括するような用語に置き換える方が妥当である。ここでは統語的を文法的と置き換えることにする。

3. カザフ語のデータの収集方法

カザフ語のデータは発表者の Shadaeva Madina、Borankulova Samal からの内省によって、また中嶋 (2013) からデータを得た。Shadaeva Madina は 3 才から 14 才まで Kyzylorda で、15 才を Almaty で過ごした。教育はカザフ語学校で受けた。Borankulova Samal は 3 才から 5 才の途中まで Karaganda で過ごし、それから 15 才まで Almaty で過ごした。彼女も教育はカザフ語で受けた。両名とも現在は Almaty で生活している。

4. 結果と考察

以下に過去時制を示す еді の例を示す。

(1) бір　билет　керек　еді-ø. (中嶋 2013: 75)
　1 つ　チケット　必要な　だった-3.sg.
「チケットが 1 枚必要でした (→チケットが 1 枚欲しいんですが)」

(2) үй-ім-е　дейін　жеткіз-ген-іңіз-ді　қал-ар　еді-м. (作例)
　家-私の-へ　まで　送り届ける-完形-2.sg.po.-を　望む-予形　だった-1.sg.
「家まで送っていただくことを望んだでしょう (→家まで送って欲しいんですけれども)」

(3) үй-ім-е　дейін　жеткіз-ген-іңіз-ді　өтін-ер　еді-м. (作例)
　家-私の-へ　まで　送り届ける-完形-2.sg.po.-を　お願いする-予形　だった-1.sg.
「家まで送っていただくことをお願いしたでしょう (→家まで送っていただけるようお願いしたいんですけれど)」

(4) үй-ім-е　дейін　жеткіз-се-ңіз　де-п　еді-м. (作例)
　家-私の-へ　まで　送り届ける-条件-2.sg.po.　思う-完副　だった-1.sg.
「家まで送っていただければと思いました (→家まで送っていただければと思いまして)」

(5) үй-ім-е　дейін　жеткіз-се-ңіз　куан-ар　еді-м. (作例)
　家-私の-へ　まで　送り届ける-条件-2.sg.no.　喜ぶ-予形　だった-1.sg.
「家まで送っていただければ嬉しかったでしょう (→家まで送っていただければ嬉しいんですけれども)」

(6) үй-ім-е дейін жеткіз-се-ң бата-м-ды бер-ер еді-м. (作例)
家-私の-へ まで 送り届ける-条件-2.sg.no. バタ-私の-を 与える-予形 だった-1.sg.
「家まで送っていただければバタを与えたかったでしょう (→家まで送ってくれるなら君を祝福するんですけれども)」(年寄から若者への依頼)

(7) үй-ім-е дейін жеткіз-се-ңіз үлкен көмек бол-ар еді-ø. (作例)
家-私の-へ まで 送り届ける-条件-2.sg.po. 大きい 助け である-予形 だった-3.sg.
「家まで送っていただければ大きな助けになったでしょう (→家まで送っていただけると、大変助かるんですけれど)」

(8) сіз бар-са-ңыз игі еді-ø. (作例)
貴方 行く-条件-2.sg.po. 良いことである だった-3.sg.
「行っていただけるなら、良いことでしたでしょう (→行っていただけるといいんですけれども)」

(9) қазір бар-са-ңыз жақсы бол-ар еді-ø. (作例)
今 行く-条件-2.sg.po. 良い である-予形だった-3.sg.
「今、行っていただけるなら、良いことでしたでしょう (→今、行っていただけるといいんですけれども)」

カザフ語の過去の時制を示す語として、еді が存在する。その例を以下に示す。

(10) сағат түн-гі он бір еді-ø. (中嶋 2013: 75)
時間 晩-の 11 だった-3.sg.
「時間は晩の 11 時でした」

上の (10) にあるように еді は過去の時制を示す。しかし、(1) から (9) にはそのような機能はなく、依頼の和らげを行っている。(1) は еді を省略しただけでも依頼としての役割を果たす。ただし еді がある場合は、ない場合よりも押しつけの度合いが低い。(2) から (7) に関しても、еді のある文と еді が省略され且つ動詞が現在形になっている文とでは前者の方が押しつけの度合いは低い。(2) қалар едім の現在形は қалаймын「私が望む」、(3) өтінер едім は өтінемін「私が願う」、(4) деп едім は деймін「私が思う」、(5) қуанар едім は қуанамын「私が喜ぶ」、(6) батамды берер едім は батамды беремін「私が祝福する」、(7) көмек болар еді は көмек болады「助けである」である。(8) も еді の文であるが、игі と еді がセットであるため、еді の省略は文法的に不可能である。(9) の жақсы болар еді を現在形の жақсы болады「良いことである」に置き換えることは文法的に可能である。しかし後者は「今、行っていただけることをお勧めします」というように、依頼表現ではなく聞き手に対するアドバイスとなってしまう。

第 1 節で指摘した通り、主節の動詞を過去時制にすることによって、依頼の押し付ける力が弱まる表現は日本語に存在しないと考えられる。両言語のこのような違いがカザフ語を母語とする日本語学習者に次のような誤解を与えうると考えられる。еді のように、過去時制の標識を動詞に付加することで、依頼内容が和らげられると学習者が考えてしまうと、(1)「～が必要でした」、(4)「～していただければと私は思いました」、(7)「～していただければそれは助けになったでしょう」などのように、依頼者の願望が過去の出来事となる文を学習者が作る可能性がある。それらは取り返しのつかない表現として被依頼者に捉えられ、被依頼者の手遅れを非難するような表現になると考えられる。それは押し付けに対する和げでなく、非難を示す可能性がある。

5. おわりに

本稿の目的はカザフ語母語話者である日本語学習者が еді の影響によっていかなる誤った依頼表現を作りうるかを検討することにあった。調査の結果、еді のように主節の動詞を過去形にすることで依頼の押し付けの力が和らげられると学習者が考えてしまうと、依頼者の願望が過去の出来事と

なり、被依頼者の対応が手遅れであるというような表現を学習者が作りだしうる。それによって、依頼者は被依頼者を図らずも責めてしまう可能性がある。本稿では CCSARP の格下げとして時制に着目した。今後の課題として、他の格下げに着目し、カザフ語を母語とする日本語学習者がいかなる誤用を犯しうるかを検討することにする。

1 Blum-Kulka, Sh., J. House and G. Kasper (eds.) (1989) Cross-cultural pragmatics: Requests and apologies, Norwood, N.J.: Ablex.

2 Brown, P. and S. C. Levinson (1978) "Universals in language usage: Politeness phenomena," In: Esther N. Goody (ed.) Questions and politeness: Strategies in social interaction, Cambridge: Cambridge University Press, - pp. 56-311.

3 中嶋善輝 (2013)『カザフ語文法読本』大学書林

4 清水崇文 (2009)『中間言語語用論概論：第二言語学習者の語用論的能力の使用・習得・教育』スリーエーネットワーク

Түйін

Бұл мақалада қазақ тілді студенттер үшін жапон тілін үйрену кезінде туындайтын мәселелердің бірі қарастырылады. Қазақ тілінде өтініштi жұмсартып айту мақсатында қолданылатын өткен шақтағы «еді»-ні сол күйінде жапон тілінде қолданар болса, түсініспеушілік туар еді. Яғни, айтылған өтініш жапон тіліндегі мағынасы бойынша өткен шақтағы іс ретінде қабылданып, қанағаттандырылмаған болар еді. Мақалада екі тілдегі осы ерекшелік нақты мысалдар арқылы талқыланады.

Кілт сөздер: мәдениетаралық тілдесудегі коммуникативті актілер зерттеулері, өтініш, өткен шақ

Резюме

В статье рассмотрены проблемы при составлении выражения просьбы на японском языке студентами казахского отделения. В исследовании рассмотрены примеры с выражением «еді». На основе примеров обсуждается лингво-прагматика японского и казахского языка, основные межязыковые единицы.

Ключевые слова: исследования коммуникативного акта в межкультурном общении, выражение просьбы, прошедшее время

Summary

This paper discusses what kind of problems occurs when Kazakh native speakers request in Japanese language. It focuses on an error of Japanese language deriving from *еді* of Kazakh. As a result, we propose that the learners make accidentally Japanese sentences that requester's wish is past event and the correspondence by the requestee is too late by expressing verbs of the main clause as past tense in order to mitigate the impositive force of the request such as *еді* of Kazakh.

Key words: Cross-Cultural Speech Act Research Project, requests, past tense

УДК 37.0(092)

ФЕНОМЕН А.П. КИСЕЛЕВА КАК АВТОРА ЛУЧШИХ УЧЕБНИКОВ ПО МАТЕМАТИКЕ: ФАКТОРЫ УСПЕШНОСТИ И ЭФФЕКТИВНОСТИ

Е.В. Андриенко – *д.п.н., проф., зав.каф. педагогики и психологии ИФМИЭО НГПУ.,*
Е.С. Альясов – *студент 3 курса Института физико-математического и информационно-экономического образования НГПУ*

В статье представлены профессиональные и личностные факторы успешного обучения математике школьников, связанные с деятельностью выдающегося русского педагога и учёного, автора большого количества учебников – Андрея Петровича Киселёва (1852-1940). Представлена периодизация его жизнедеятельности в контексте основных достижений как педагога и автора. Киселев популярен в России как автор самых знаменитых учебников по математике для всех уровней обучения, но особенно для школьного обучения. Его учебники переиздавались в Российской империи, а затем в Советском Союзе, достигая миллионных тиражей. Популярность этих учебников определяется тем, что содержание математики (как предмета изучения) разработано автором на основе принципов максимальной доступности, простоты и последовательности. По учебникам А.П. Киселева можно учить математику самостоятельно, поскольку в них нет никакой лишней и ненужной информации: вся информация необходима и достаточна. Содержание учебников по математике Киселева отражает и его методику преподавания. Он в течение многих лет был учителем математики, что и послужило стимулом для разработки доступных учебных материалов, легко воспринимаемых обучающимися. Несмотря на то, что Киселев не был ученым, его практическая деятельность в качестве учителя и преподавателя математики стала эталонной. По его учебникам обучались самые выдающиеся